

この景のこゝろ

「無関係な私たち」 (前編)

四〇年前、私たちは一三歳だった。東海道線みたいに緑色のジャージを着たのが私で、オレンジ色が彼女だった。

彼女は小柄で、というか、学年で〇七番目くらいに背が低く、「□□□」した声で女のくせに自分を「ボク」と呼んでいた。いわゆる「アノ声」とは全く違う個性的な声で、私は「声優になればいいのに」と思っていた。

私たちはつき合っていたのだろうか、いなかったのだろうか。よくわからない。

ただ、私とは別な高校に進んだ彼女が、制服のまま私の部屋で本を読んでいた姿が目につく。私は「つき合っていた」ことにしたいのだと思う。「七年間」という数字を覚えている。彼女を愛した歳月はそれだけあった。

いっしょに連絡を取らなくなった彼女の消息を聞くことがあった。引越し、結婚をし、一児の母だとか。

葬式のばさまの遺影に 髭を描く

(おーくま)

黒猫堂 アンティークと呼び 「ミ」を売る

(おーくま)

地元の人 九八回

(地元の人：A アナウンス：B)

B「心理の発作、初めはそう考えていた、予兆はありました、四〇の年を越えられるか、重い荷物でした、耐えきれるか、私の困難でした、地獄の淵に立たされているようにも思えました、予兆は数回はありました、病気とは考えられなかった、乗り越えなければならぬ壁だと考えていたのです、そんなことが私だけの特徴だとは言いません、誰もが歳をとる、誰にも訪れる危機だろうと今ならそう言える、ですが人生を考える習慣が私にはなかった、いきなり地獄をのぞき込んだわけですから私は慌てふためいた、人生の危機であったのです、そこから再び自分の人生に立ち返れるか、いえ、実はもう無理だろうと観念もした、ただ耐えられるなら耐えなければならぬ、そう考えたのも最初だけで幻想が現れると悲鳴を上げた、声にならない声でしたけれど、数日後には男の姿は消えていた、一時私は息を吐いた、会社に向かいました、送迎のバスの中にいたとき、歩道を歩いている人たちが私をいつせいに振り返り眺めこんだのです、危機が去ったわけではなかった、それは悪い知らせのように感じられた、会社への行き帰り私はもう出来るだけ怒を見ないようになりました、どうしたい、顔なじみの仲間が

声をかけてきます、私は答えようがない、ただ調子が悪いとだけ返事するのがやっとです、暗くなった帰り道私の視線は釘づけになりました、どうらんでも塗ったように白い顔が闇の中に浮き上がったのです、私だけが見たのか他の人は仕事帰りの、ようやく落ち着いて会話を楽しんでいるようでした、会話を繰り返しています、何事もなかったように：錯覚か：私は自問自答した、白い顔は私しか見ていなかったようで乗車している私以外のものは何事もなかったように日常を話し合っていた、私も一度は考え直してみました、日常である、そんなに変なことはおこるまいと：内心冷や汗をかいていました、そして駅のホームを渡るうとしたときです、ベンチに白い顔をした男が横になっていたのです、怪談話はテレビで何度も見ていたけれど現実にそのようなことはあるまいとたかをくくっていました、子どものころ狐に馬鹿されたなどという大人の会話を珍しく聞いていました、がまさか自分にそのようなことは無いだろう：まして自然の少ない町中であつては：落ち着いて男の姿を眺めることはできません、幻想は私にとり憑いたのです、借間に帰りたいとは思えなくなった、他へ行くことはできないけれどまっすべ帰る気にはなれなかった、逃げ場を失つても」

(丁)